

2. 中高一貫の漢文指導 ——中学漢文指導の充実を考える—— 前編

横 地 武

① 概論

② 総論

1. 中学学習指導要領と古典
2. 中学校での古典（漢文）指導の実態
3. 高校での漢文教育の位置づけと現状
 - (1) 国語Ⅰでの古典（漢文）の取り扱い
 - (2) 古典Ⅰについて
4. 漢文指導の問題点と克服の方法（前編）

③ 実践

1. 中学校での漢文授業の試み
2. 生徒の意識と実力（アンケートと試験の結果）
3. 高校生との比較——中学と同じ教材を用いて——

④ まとめ

（後編）

① 概論

高校での古典（漢文）指導をより効果的にするには高校に入学してくる生徒達が、中学校においてどのように古典（漢文）指導を受けてきたのかを知ることが大切である。しかし、高校の国語教師は、一般にそれにはあまり興味や関心を払わずに授業を進める傾向があるのではないだろうか。以下は、中高の漢文を一貫して教えられる環境を生かし、限られた高校の漢文の授業の無駄を省くため、中学でどこまで漢文入門を実施できるか試みるための理論的根拠である。

② 総論

1. 中学校学習指導要領と古典

「中学校学習指導要領」は、昭和22年度に初めて試案が示されて以来、平成元年度に至るまで5回にわたって改訂された。その中から、特に古典（漢文）の変遷をみると、昭和52年度版で表記が簡略化された以外は、改訂を重ねるごとに、古典への関心を深め、古典の基礎を養う方向へと進んできた。現行の平成元年版では「指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにすること。」と、指導方法も具体的に示されている。また指導書（平成元年版）には「古文と漢文を理解する基礎

を養うには古文や漢文のもつ独特のリズムに慣れさせたり、表現の仕方や文章の特徴に目を向けさせたりするなど指導上様々な工夫が考えられる。」と書かれている。だからといって、あまり細部まで中学で扱うのではなく、教材に即して必要な範囲で適切に指導する必要があるともされている。ところで、この二つの点は非常に矛盾する面も含んでいるように思われる。なぜなら、生徒は漢文を学ぶということなら、訓読でき、漢文特有な言い回しに触れることで現代文とは異なる言語文化を知る喜びを得ると思うからである。要は現場で生徒の様子を見て、どこまでなら理解し得るのか見極めて指導していくことでより深く漢文に親しむことができるのではないだろうか。

2. 中学校での古典（漢文）指導の実態

「中学校国語指導書」には、古典への関心は古文と漢文を理解する基礎的な能力や態度と密接に関連するものなので、関心をもって文章を読み、古典への親しみを深める学習過程で、古文や漢文を理解する基礎が養われるよう、配慮することが重要であると記されている。ここで中学での漢文授業について現状をまとめると次のことが言える。

- (1) 中学での基本的な教材は、格言、故事成語、「史記」「論語」、唐詩であり、それらは高校の教科書にも載っているものもある。したがって内容

は高校生が学習するにも堪えられるものである。

- (2) 必ずしも中1から中3へと難化しているわけではなく、分量も少ない。
- (3) 教材には、口語訳、書き下し文が付いている場合が多く、原文を読む機会はなく、漢文の特質にふれたという感覚はない生徒が多い。
- (4) したがって訓読のためのきまりは簡単にしかふれられないので、そのきまりをきちんと覚えていない。

以上のことから普通は中学の漢文指導では体系でたことができず、高校でもう一度同じことを繰り返すことになる。これは時間のロスではないだろうか。

3. 高校漢文の位置づけと現状

高等学校学習指導要領解説(平成元年版)を参考にして古典の扱い方を考えてみたい。

(1) 国語Ⅰでの古典(漢文)

「古典の学習は、ただ単に古文、漢文の現代語訳に終始するものであってはならない。古典もまた現代文と同様、想像力を働かせながら表現に即して読むべきものである。……」と記されている。さらに漢文の訓読のきまりについての指導は、必要な範囲内で適切に行う必要があるとも述べられている。ここで必要な範囲内がどの程度かという問題があるが、現在の教科書を見ると漢文の訓読のきまりについては一通りのことが出てくる。——送り仮名、返り点、返読文字、再読文字、助字。さらに疑問、反語、否定形などの句形も含まれている。これを一単元で扱うのは無理があるのではないだろうか。

(2) 「古典Ⅰ」について

「古典Ⅰ」の特徴としては次の5項目が考えられる。

- ①読解力、鑑賞力の育成
- ②自己進化、教育力の育成
- ③古典に親しむ態度の育成
- ④文化、伝統の尊重
- ⑤音読の重視

これらは、「国語Ⅰ」を踏まえた上のことであるが、かなり高度なことまで求めていると考えられる。⑤の音読の重視ということなら、訓読が確実かつ迅速にできなければならない。しかし、漢文の本をすらすらと読めるのであれば、その時点で読解も8割できているといえる。生徒達が漢文を難解に思うのは、まずもって正確に読むことができない点にあるのではないか。

「国語Ⅰ」「古典Ⅱ」についてはそれぞれⅠを発展させて学習するものであるから、読解力、鑑賞力の向上、Ⅰの内容の習熟が求められるのである。限られた漢文

の授業の中ではこの段階まで到達できない。そこで高校に入学してくる時点で、訓読することにある程度慣れているということは非常に漢文に親しむ上で重要なことになる。

4. 漢文指導の問題点と克服の道

生徒の多くが漢文学習に困難を感じているのが実態ではないだろうか。具体的にまとめてみると、

- ①漢字・漢語に対する抵抗感がある
- ②句法、訓読法、内容が難解である
- ③漢文学習に必要な性を感じない
- ④授業数が現文、古文に比らべ少ない

さらに、生徒達は少しむずかしくなると、考えることを放棄してしまうという傾向もある。奥深く理解、鑑賞していく上で、壁を作らないように指導していくこともなかなか困難である。こうすれば理解できるという方法を丁寧に示し、生徒がそれなら自分でもできると感じさせられないだろうか。常々考えていることだが高校生になると機械的な作業を嫌い、それくらいなら何とかかなと思ひ込み、確実に知識として定着するまで反復しない。そのことが、古文漢文の入門期のある一定のところ壁をつくる原因の一つだと思う。それなら好奇心のより強い中学生のうちに、基礎的な内容を少しづつ指導した方が効果的ではないだろうかと考えて実践することにした。指導する上で注意したことは、1つ1つ理解していけば漢文は難解で手に追えない存在ではないことを生徒に実感してほしいということである。

〈最後に〉

この他にも、中学校で古典(漢文)を教える時に問題となることを掲げてみると、

1. 古典を習う意義——導入期において
2. 歴史的仮名遣いは、中学校における古典指導上必要か。特に振り仮名の扱いをどうすべきか。
3. 漢文で旧字体が使用されている場合。
4. 文語文法に触れずにどこまで教えられるか。
——口語文法との兼ね合い——
5. 時間のかけ方(古典にばかり時間をかけすぎてしまわないか)

という具合に浮かんでくる。

今回の拙稿では理論的根拠を述べるに終わったが、後編では、上の1～5の問題点も踏まえて、実際に授業を行った報告と、それで本当に漢文指導が充実したと言えるかを考えていきたい。